

◎今週の御言葉 「自分の父の家」（ゼカリヤ書8章1節～8節、ルカの福音書2章41節～52節）

「わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住もう。エルサレムは真実の町と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれよう。」（8:3）「するとイエスは両親に言われた。『どうしてわたしをお探しになつたのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかつたのですか。』」（2:49）

◎神の都エルサレムを特にイエス様は愛されましたか、今日の私たちにとって、それはどこに当たるのでしょうか？

◎ゼカリヤ書8章より、神様がご自分の民を「ねたむほど激しく愛し」ておられるのです（2,1:14）。神様のねたみは「憤り（怒り1:2）」（2）と関係しているのです。「神がねたむ」のは、主がイスラエルの民と契約を結んだ故です（出エジプト20:15, 34:14, 申命記5:9）。彼らは主のものであって、他の何ものにも属さない。それ故「偶像礼拝」が禁止されているのです（十戒：第3戒）。彼らが不従順で、契約を結ばれた神様をないがしろにしたのなら、神様は無関心ではいられないのです（契約関係を忘れることに対する警告と神様のねたみは申命記4:23～24, 6:15, 29:18～20, 32:16, 21参照）。ゼカリヤ書では、主のねたみはご自身の選ばれた町エルサレムに向けられているのです（1:14～17）。また8:1～8においても、主があわれみをもってエルサレムに帰ること、慰めの約束、エルサレムの選びの更新、これらはみな新しい契約を暗示し、万軍の主の熱心がこれらを実現する、と約束されているのです。

◎ルカ2章ではイエス様が12歳になられた時、両親と一緒にユダヤ（イスラエル）三大祭りの一つ「過越の祭り」にエルサレムに上られたのです（過越祭の起源：出エジプト記14章）。

ユダヤ人の男子は13歳で「戒めの子」と呼ばれ、律法を守るユダヤ教の社会に成人として迎えられたのです。その前年中に、父は必要な準備教育をすることになっていたのです。それで、12歳のイエス様は両親の過越祭の巡礼に同行することになったのです。両親が帰宅途中、イエス様が同行していないのに気がつきエルサレムに引き返すと、イエス様はエルサレムの神殿で「教師たちの真ん中に座って、質問されたり、問答しておられ」、人々はイエス様の知恵と答えに驚いたのです。マリヤがイエス様に事の次第を問うたところ、イエス様は「わたしの父の家にいることを、ご存じなかつたのですか」と両親に答えて、ご自分が「神の子である」ことを宣言しておられ、その上でイエス様はナザレに帰って約18年間ご両親に仕えられ、イエス様の謙卑の期間を過ごされたのです。